

立山 雄山 山頂 遺跡

—雄山神社峰本社社殿建替事業に伴う調査—

1997年3月

立山町教育委員会



巻首図版

旧社殿の柱間に剣岳を望む

序

靈峰立山は、駿河の富士山・加賀の白山とともに古来「日本三靈山」の一つとして世に名高い山岳信仰の山であり、また、富山県人が心のよりどころとしてきた山もあります。

このたび、幕末の万延元年以来136年ぶりに、この立山の峰本社が御改築されることとなり、それに伴い調査を実施しました。

今回調査の行われた立山雄山山頂遺跡は、まさしく立山信仰全体の中心となる遺跡であり、ここで得られた資料は、立山の歴史を解明するためだけでなく、山岳宗教史を解明するための大きな手がかりとなることでしょう。

この報告書がより多くの方々に利用され、地域の歴史と文化の理解に役立てば幸いです。

最後に、調査に際して御援助いただいた富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター、雄山神社をはじめとする皆様と、調査に御協力いただいた環境庁並びに立山博物館と地元や諸方の皆様に衷心より感謝申し上げます。

1997年3月

立山町教育委員会

教育長 金川正盛

例　言

1. 本書は、富山県中新川郡立山町立山峰1番地に所在する雄山神社峰本社社殿建替事業に伴う、立山雄山山頂遺跡の調査報告書である。

2. 調査は、宗教法人雄山神社の委託を受け、立山町教育委員会が実施した。

3. 現地調査の期間は、平成8年6月3日から6月5日までの延3日間である。

調査期間中は雄山神社をはじめ地元や工事関係者の方々から多くの御協力を得た。記して謝意を表します。

4. 調査事務局は立山町教育委員会に置き、社会教育課主事三鍋秀典が事務を担当、社会教育課長開上寛が総括した。

5. 調査担当者は、立山町教育委員会社会教育課主事三鍋秀典と財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財事務所文化財保護主事大野淳也である。

また、現地調査には、河合忍（富山大学大学院生）、田中幸生・向井裕知（富山大学学生）が参加し、立山町教育委員会社会教育課助手佐伯悦野がガイドを勤めた。

6. 調査にあたり、富山県教育委員会文化課・富山県埋蔵文化財センター・富山県立立山博物館から有益な御教示を得た。また、調査から報告書作成に至るまで、下記の方々から御協力を得た。記して謝意を表します。

富山大学教授宇野隆夫・雄山神社宮司佐伯令鷹、上市町教育委員会主任高慶孝、宗教法人雄山神社、丸新志鷹建設株式会社、地元芦嶺寺地区

7. 遺物の注記は「立山雄山山頂」とし、次に日付の順に記した。

8. 遺物整理・実測・製図は、三鍋が中心となり、河合忍・福石純子（富山大学大学院生）、田中幸生・中島義人・向井裕知・芳賀万里子・高志こころ・磯村愛子（富山大学学生）が協力した。

9. 本書の執筆は、三鍋・大野・向井が担当し、執筆分担は各文末に記した。編集は三鍋が行った。

目 次

I 立山雄山山頂遺跡の歴史的環境と立地	1
1. 歴史的環境	1
2. 遺跡の立地	2
II 調査に至る経緯	2
III 調査概要	2
1. 調査の目的と方法	2
2. 遺物	4
(1) 古銭	4
(2) 金器製品	4
(3) 木製品	4
IV 調査結果	11
1. 遺跡・遺物からみた立山信仰の軌跡	11
2. 雄山神社峰本社の成立に関する考察	13
参考文献	16
写真図版	

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	1
第2図 遺跡周辺の地形図	3
第3図 調査地区全体図	折込み
第4図 峰本社頂上社殿基壇石積み東側立面図	折込み
第5図 峰本社頂上社殿基壇石積み西側立面図	折込み
第6図 峰本社頂上社殿基壇石積み南側立面図	折込み
第7図 峰本社頂上社殿基壇石積み北側立面図	折込み
第8図 遺物実測図（古銭拓本）	5
第9図 遺物実測図（古銭拓本）	6
第10図 古銭の計測部位	7
第11図 鉄釘の計測部位・名称	7
第12図 遺物実測図	8
第13図 遺物実測図	9
第14図 遺物実測図	10
第1表 古銭計測表	7
第2表 鉄釘計測表	7

I 立山雄山山頂遺跡の歴史的環境と立地

1. 歴史的環境

立山は、かつて「日本三靈山」の一つに数えられる信仰の山であった。

その歴史は古く、「立山開山縁起」などによれば、大宝元年（701）に慈興上人（佐伯有若あるいは、その子有頼）によって仏教の山として開かれたと伝えている。なお、佐伯有若は実在の人物であり、その実存年代や、比叡山延暦寺の康濟律師が立山山麓に仏堂を建立したとされる年代などから、10世紀初め頃には開かれたものと考えられている。

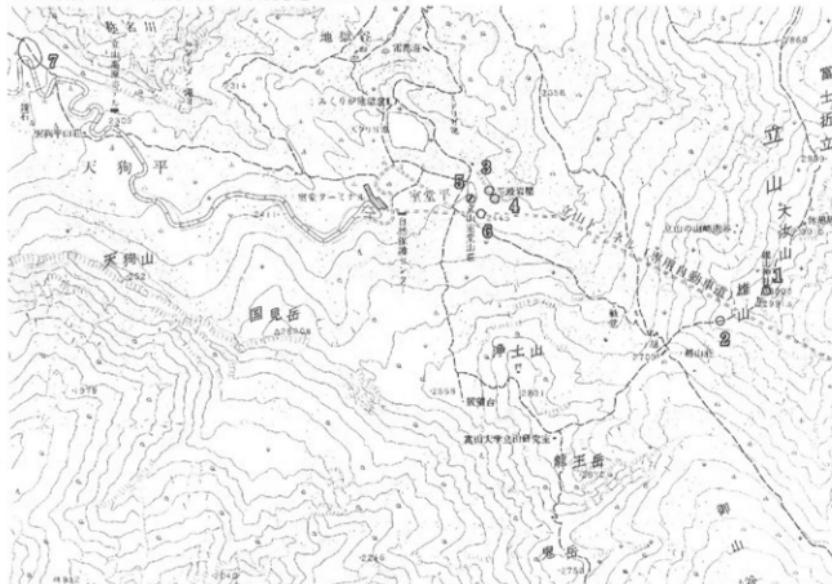
平安時代中期以降、浄土思想に伴い地獄の思想が広がったが、立山は都に最も近い地獄として広く知られ、「本朝法華縁起」や「今昔物語集」に説話が収録されている。

また、12世紀中頃に著された『伊呂波字類抄』や、鎌倉時代に著された『神道集』によって、立山山中に阿弥陀如来の淨土があるとされていたことも知られる。

中世には、立山信仰の担い手であった芦嶺寺・岩崎寺の衆徒が、かなりの勢力を有していたことを示す文献資料が残っており、立山信仰の興隆が窺える。

近世、江戸時代に入ると、参詣のための登山者が次第に増加し、立山は修験の山から神定の山へと変化し、立山信仰は次第に庶民化していった。これは、衆徒の積極的な布教活動により、立山信仰が全国的に広がったことと、加賀藩主前田家の手厚い庇護を受けたことによる。このようにして、立山信仰は隆盛を極めた。

しかし、明治維新となり、新政府の神仏分離・廃仏毀釈などの政策により、数多くの仏像・建物などが棄却され、立山信仰は大打撃を受ける。また、加賀藩からの寄進等の廃止により経済的にも困窮し、以後衰退の一途を辿り、立山は信仰の山から観光の山へと変貌を遂げるのである。



第1図 遺跡位置と周辺の遺跡 1.立山雄山山頂遺跡 2.立山三ノ越遺跡 3.玉殿窟 4.虚空藏窟 5.芦嶺特室堂
6.立山室堂納骨遺跡 7.平狗平遺跡

2. 遺跡の立地（第1～7図）

立山雄山山頂遺跡は、立山の主峰雄山の山頂、標高3,003mの絶頂に立地する。山頂には、石積みによって約7m四方の広場が作られ、この広場の北よりに雄山神社本社が鎮座する。

なお、いわゆる覆土といふものは一切存在せず、遺物は石の隙間に落ち込んでいる状態である。

立山信仰において、主峰雄山は阿弥陀仏の淨土とされ、登拝信仰の対象となっている。ここに社殿の創建された年代は不明であるが、1928年に峰本社の桟木破損部から大永四年（1524）在銘の金銅製法華経納札が発見されている。

また、山頂への登坂路途中の三の越と呼ばれる場所では、12～13世紀に属する珠洲焼の経筒外容器の底部とみられる土器破片が採集されており、この頃すでに登拝信仰が行われていたことを窺わせる。

周辺には、立山信仰に関わる数多くの遺跡が存在する。

まず、山頂への登坂路沿いには立山三の越遺跡が、山中における信仰の基地であった室堂平には芦嶺寺室堂遺跡・玉殿窟・廬空藏窟などの遺跡があり、一帯には立山信仰に関連する石造物が広範囲に分布し、極めて多数の遺物が採集されている。

また、画面の範囲からは外れるが、北方剣岳には剣岳山頂遺跡が、西方の大日岳山系の山中には大日岳山頂遺跡・七福神岩屋の各遺跡がある。さらに、大日岳山系の山中には行者窟・護摩平などと呼ばれる所もあると言われているが、詳細は不明である。

なお、立山高原道路の標高2,430m付近に所在する大狗平遺跡からは、昭和29年に縄文時代の石器が採集されており、狩獵の際の落とし物であろうと考えられている。

II 調査に至る経緯

立山雄山山頂遺跡の所在する雄山山頂には、幕末の方延元年（1860）に建てられた峰本社頂上社殿が鎮座していた。そして、この社殿は、建立以来130年以上の歳月を経ており、補修の効果も無いほど老朽化が進んでいた。

このため、再建の必要性についてはかなり以前から論じられていたことではあるが、平成6年の春、関係者により社殿建て替え（解体再建）の決定がなされた。

そして、社殿の鎮座する雄山山頂が埋蔵文化財保護地であるため、雄山神社から立山町教育委員会に、その取り扱いに関する問い合わせがあった。

これを受けて、雄山神社と立山町教育委員会で協議した結果、遺跡が標高3,000mを越える高山の絶頂に立地し、通常の発掘機材の搬入などは不可能であること等を考慮し、旧社殿の柱抜き取り時に立ち会い調査を行う事となった。

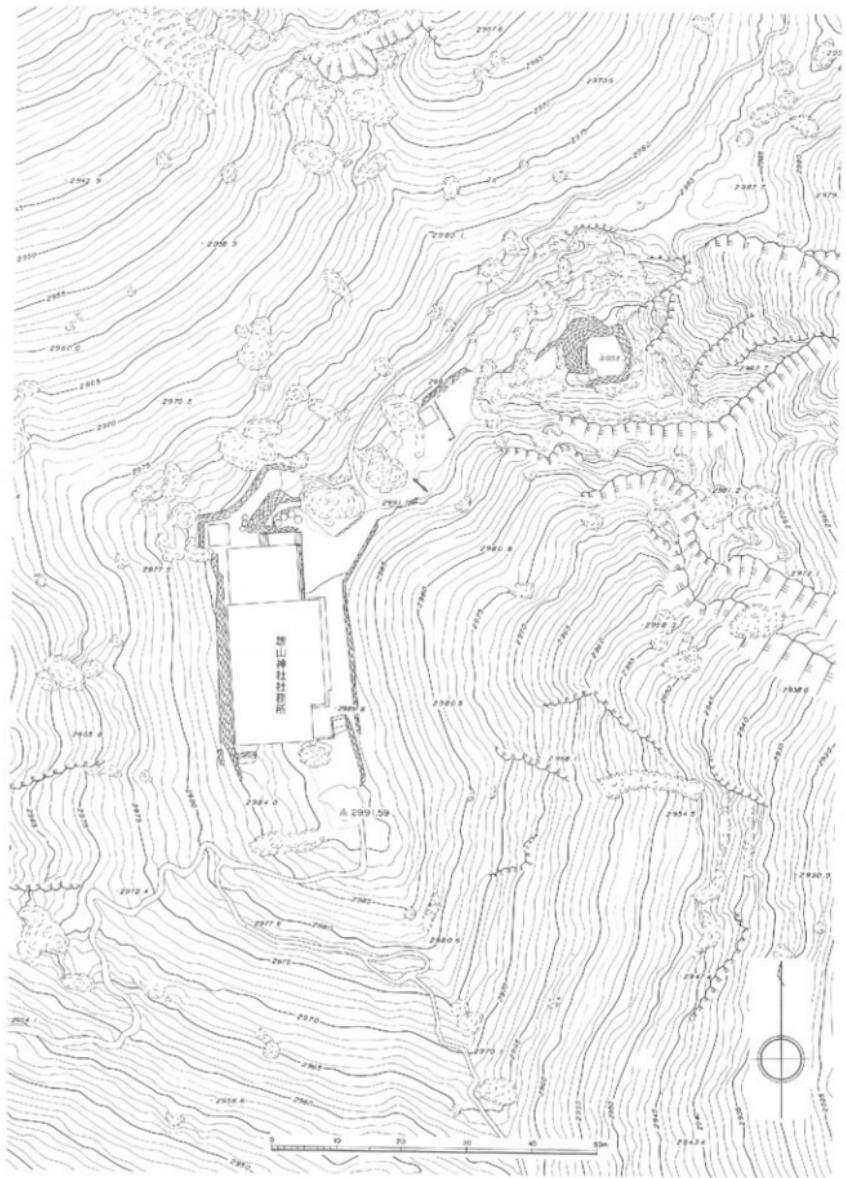
調査は、平成8年6月3日～5日の延べ3日間にわたって実施した。なお、調査実施にあたっては、財團法人富山县文化振興財団埋蔵文化財調査事務所から調査員の派遣を受けた。

III 調査概要

1. 調査の目的と方法

調査の目的の一つは、本殿地下に埋蔵されている遺物の採集・検討により、雄山山頂における信仰開始時期の上限を明らかにする事であり、今一つは、万延元年の再建時に埋納されたであろう地鎮具を検出することにより、立山信仰最盛期の信仰形態を明らかにする事であった。これは、これまで実施された分布調査等では未明確の点であり、本殿の地下を調査出来る千載一遇の機会を得て、大きな期待が寄せられた。

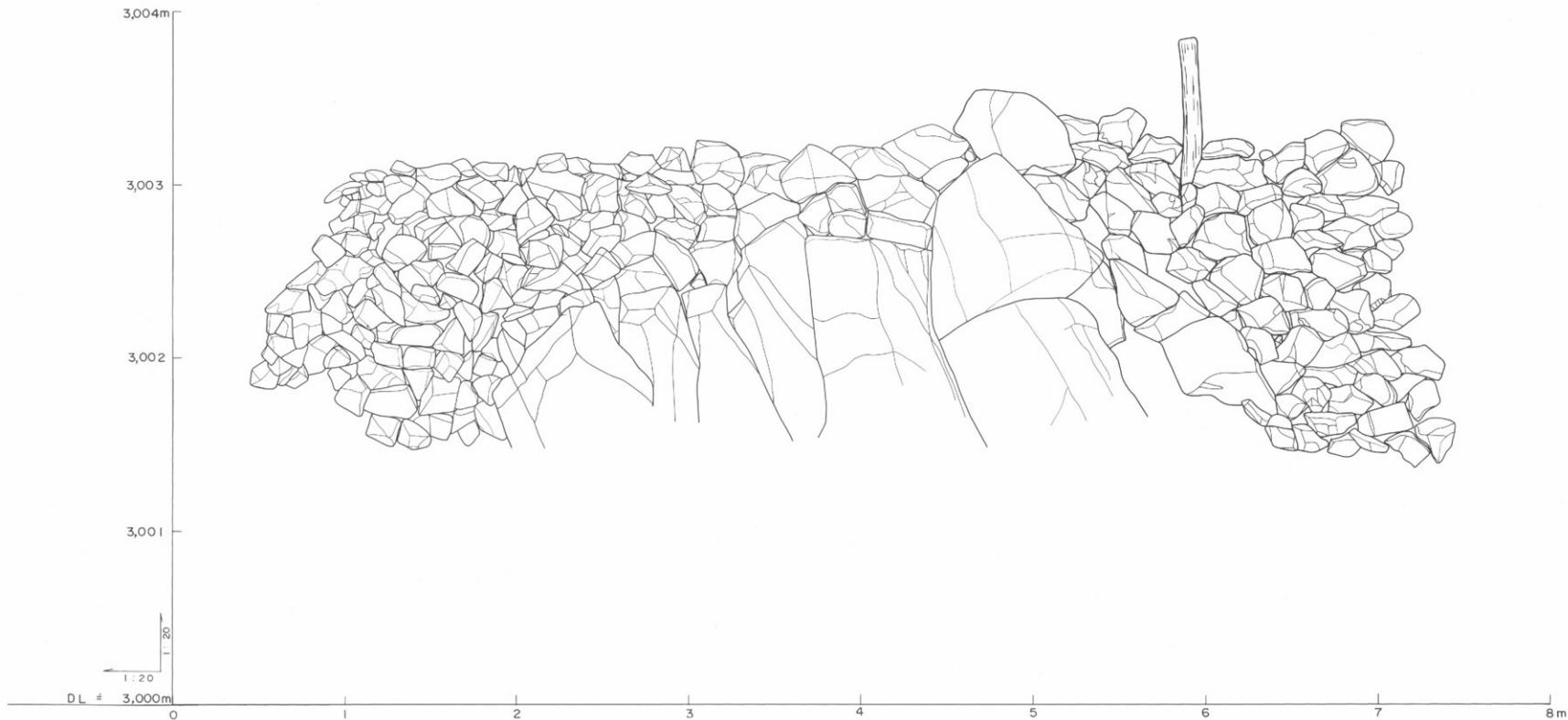
6月初旬に現地に入ったが、調査現場の環境は、想像を絶するものであった。積雪は、頂上直下の社務所前で2m近くあり、晴れても風が強く体感気温は氷点下である。実際に、調査区内においては、地表面から4～5cm下は永久凍土状態であり、掘立柱の撤去作業も、石を動かすというよりも氷を割る作業の連続であった。



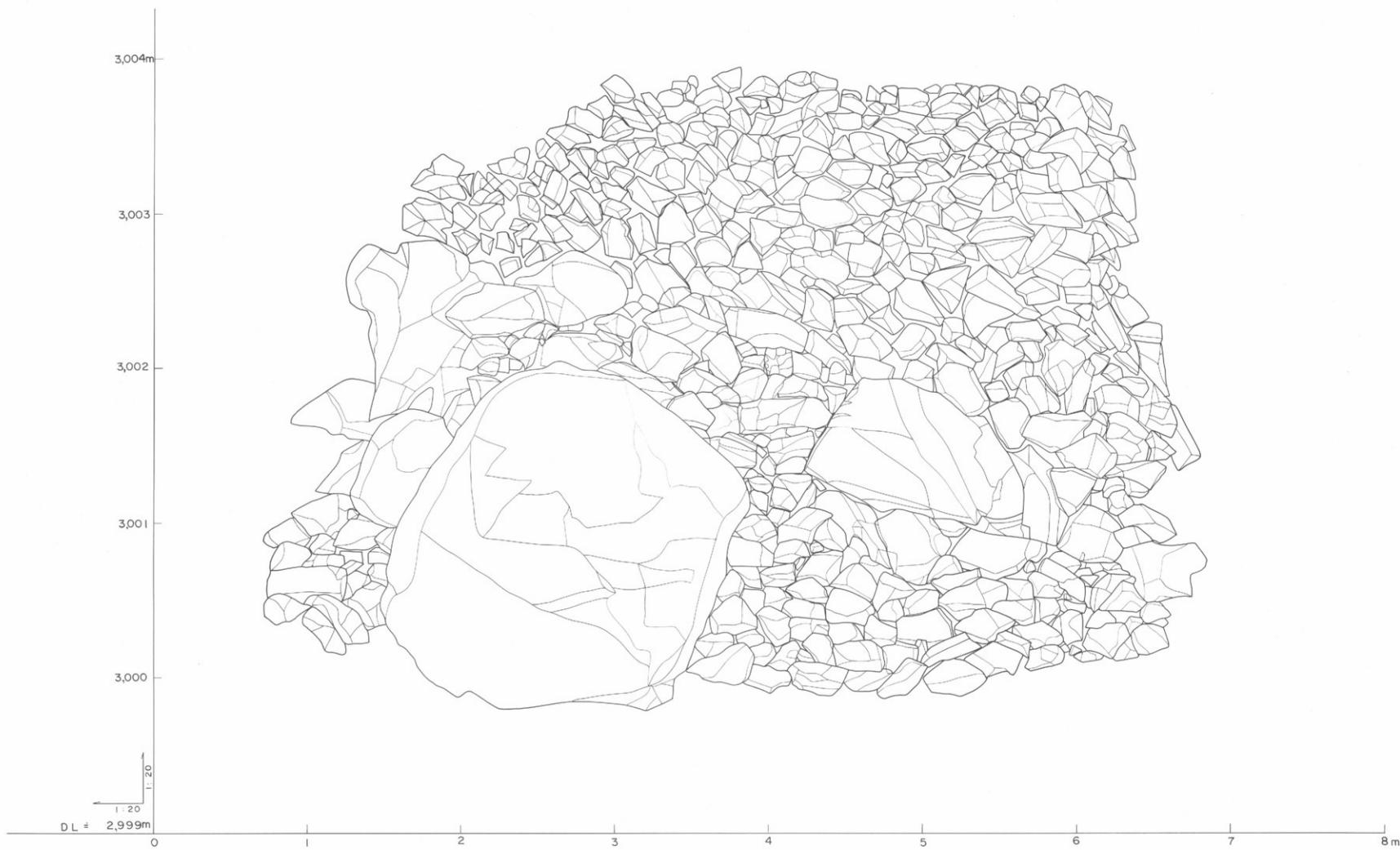
第2図 遺跡周辺の地形図



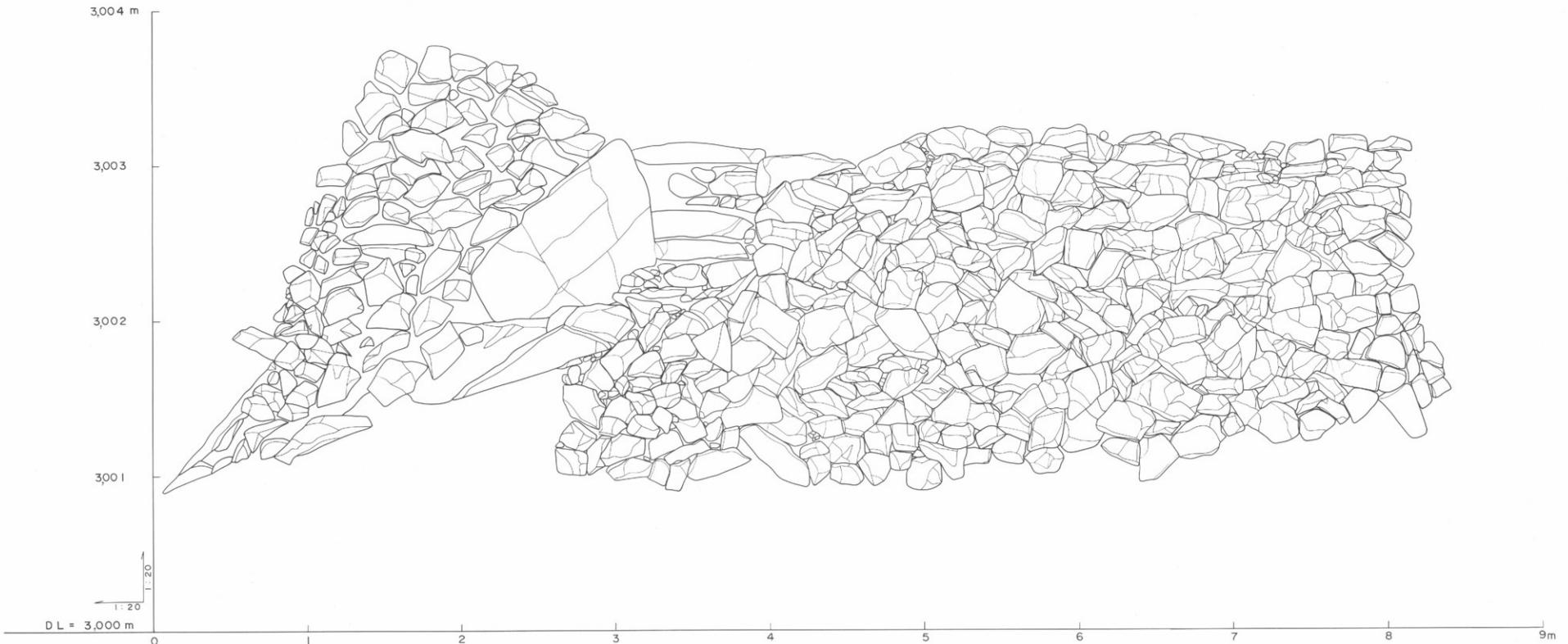
第3図 調査地区全体図



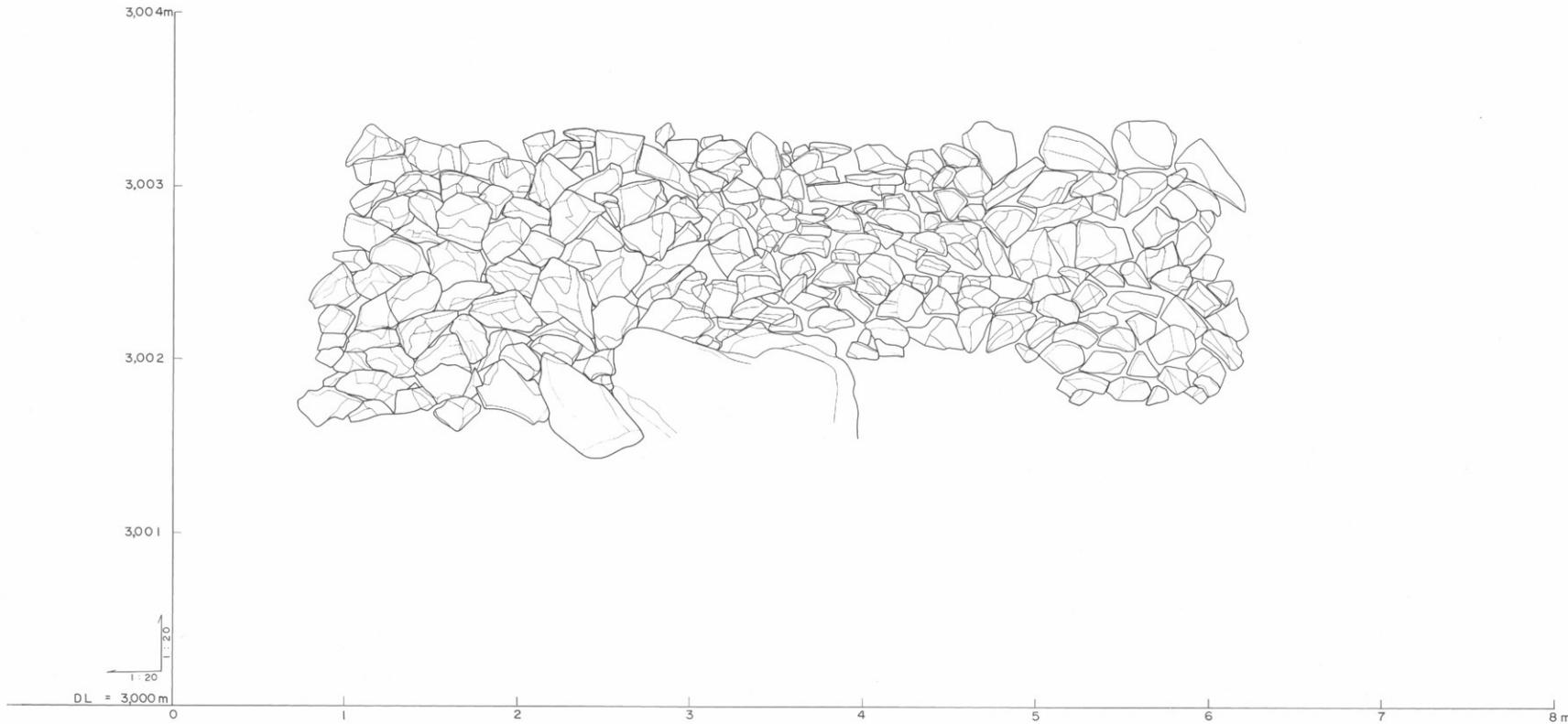
第4図 峰本社頂上社殿基壇石積み東側立面図



第5図 磐本社頂上社殿基壇石積み西側立面図



第6図 峰本社頂上社殿基壇石積み南側立面図



第7図 峰本社頂上社殿基壇石積み北側立面図

このような状況であるから、遺物も水没けの状態であり、恐らく冬季間には凍上し夏季には融下するという動きを石の隙間に繰り返していたものと考えられる。このため層位的な採集は最初から断念せざるを得なかった。

また、調査の大きな目的の一つであった地鉄具も確認されず、遺構に類するものは一切検出出来なかった。

ただ、調査開始時には未だ旧社殿の柱二本が残されており、頂上への登坂路の最終段に立って柱（本殿）の方向を見ると、正面の柱の間に遠く剣岳が望まれた（巻首図版参照）。これは、本殿建立方向の規則性（参拝方向の規則性）を示すものと考えられ、これを確認・撮影出来たのは大きな収穫であった。

(三鍋)

2. 遺物

(1) 古銭（第8～10図、第1表）

1～33は寛永通寶であり、字体から、1・2は古寛永銭（1636～1659頃に鋳造）、3～33は新寛永銭（1668～1868頃に鋳造）と考えられる。3・4は背面に「文」字を有する文銭であり、1668～1683年頃に鋳造されたものと考えられる。5は背面に「作」字を有することから佐渡銭座で鋳造された製品の可能性が高く、材質が銅であることから1714～1732年頃に鋳造されたものと考えられる。6～9は背面に「元」字を有する元銭である。10は背面に字を有するが、遺存状態が悪いため詳細は不明である。

34～36は十銭貨幣で、34・35は各々大正11・12年鋳造の白銅貨、36は昭和15年鋳造の菊十銭アルミ貨である。

37～39は五銭貨幣で、37・38は各々大正10・11年鋳造の小型五銭白銅貨、39は昭和13年鋳造の五銭青銅貨である。

40～48は一銭貨幣で、40・41は各々明治8・15年鋳造の竜一銭銅貨、42～44は大正10年、45は昭和8年鋳造の桐一銭青銅、46・47は各々昭和14・15年鋳造のカラス一銭アルミ貨、48は昭和16年鋳造の富士一銭アルミ貨である。

(2) 金属製品（第11～12図、第13図 98～102）

50～79は頭部が丸字状に屈曲する角釘である。50～77は身部と同じ太さの頭部を持つもので、頭部が強く屈曲する個体が多く、中には身部と頭部が接する個体も認められる。

78・79は厚さ1mm程度の頭部を持つ角釘で、頭部は身部に対して垂直に折れ曲がり、端部は内側（下方）に折れ返る。

80～88は扁平な頭部を持つ角釘である。

89～98は扁平で円形に近い頭部を持ち、身部断面が円形に近い形状のものである。

99は頭部に真鍮製の釘隠しを付けた飾り釘である。

101・102は社殿の金具と考えられる鉄製品であるが、用途等の詳細は不明である。

なお、49・100は宝堂で表採された遺物であるが、参考のためにここに掲載した。

49は平造の鉄製刀子で、刃部長は約7.5cm、柄部は残存部位に限られるが約4.5cmを測る。

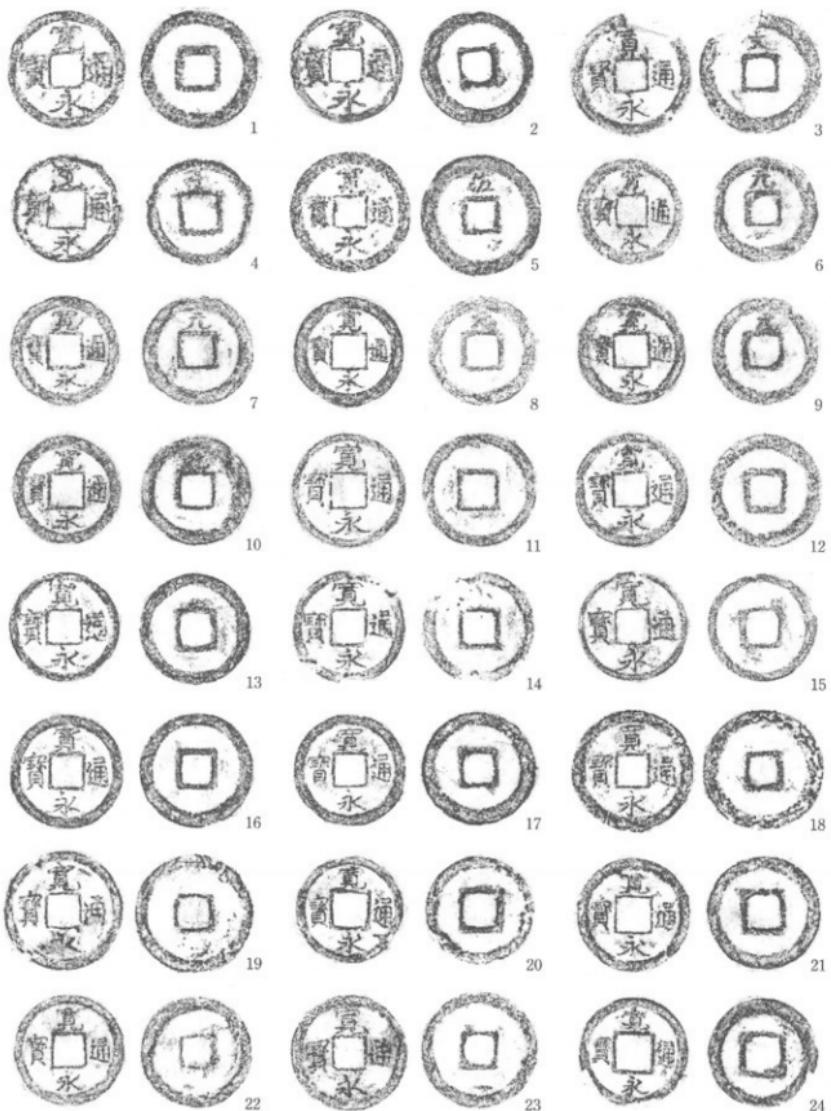
100は銅製飾り金具で、六葉の形態をとり、部分的に鍍金が残る。

(3) 木製品（第13図 103～105）

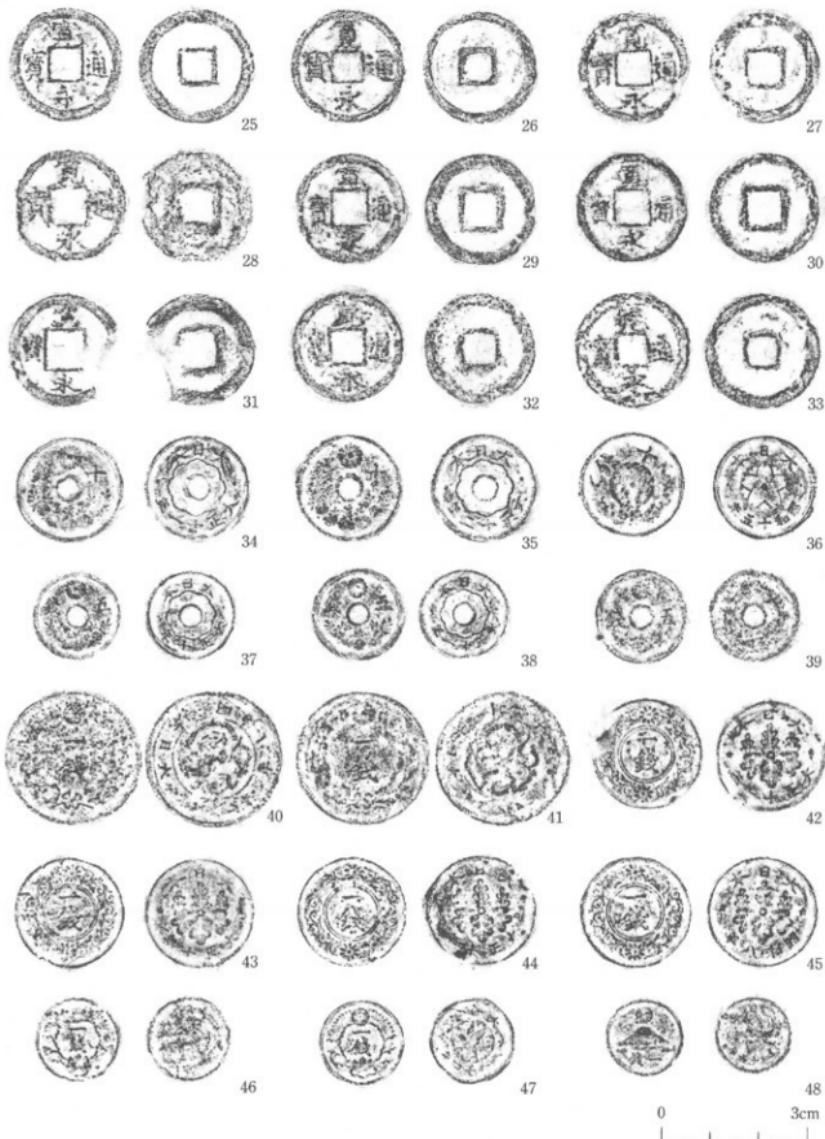
103・104は三宝（三方）の脚部破片で、内外面黒漆塗りである。

105は一辺10.4cmの方形板状を呈する漆器である。表面は赤漆塗りの上に金泥で「違い鷹の羽紋」を描き、裏面は黒漆塗りである。「違い鷹の羽紋」は雄山神社の紋であるが、この漆器に描かれているものは、現在雄山神社において用いられている「違い鷹の羽紋」とは若干の差異が認められ、これは時代差をあらわすものであろうと考えられる。

(三鍋、向井)



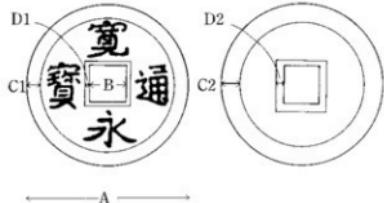
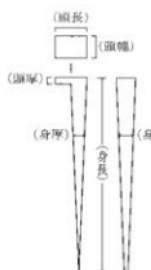
第8図 遺物実測図



第9図 遺物実測図

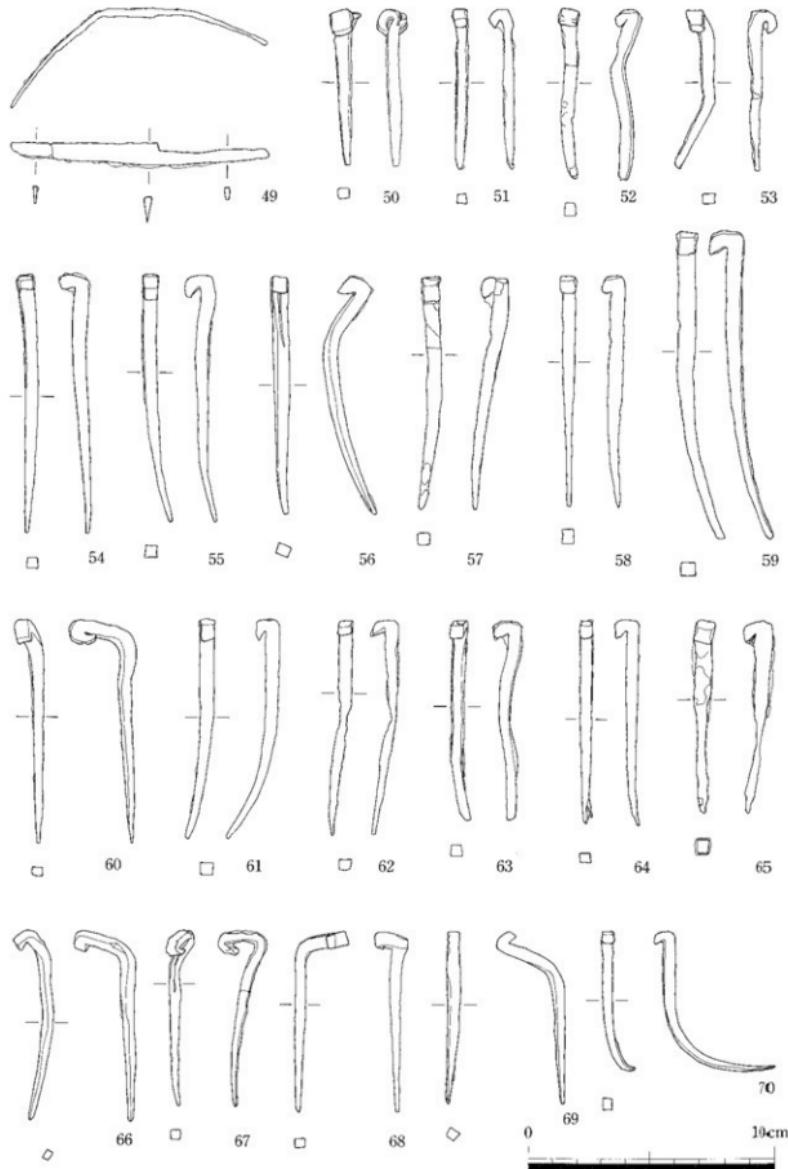
第1表 古銭計測表

番号	種別	A	B	C1	C2	D1	D2	重量
1	古寛永	24.0	6.5	2.0	3.5	0.8	2.0	2.7
2	古寛永	23.0	6.1	2.0	4.0	0.8	1.0	2.5
3	新寛永	25.0	6.0	2.8	3.8	1.0	1.5	2.6
4	新寛永	22.5	7.0	2.0	3.0	1.0	1.0	2.2
5	新寛永	25.0	6.0	2.8	3.8	1.0	1.2	3.3
6	新寛永	22.0	6.0	2.8	3.5	0.8	1.5	2.1
7	新寛永	22.5	6.1	3.0	3.5	1.2	1.5	2.3
8	新寛永	22.5	6.5	3.2	3.0	1.0	1.5	2.6
9	新寛永	22.5	6.5	2.8	3.0	1.0	1.2	1.9
10	新寛永	22.5	6.5	2.8	3.0	1.0	2.0	2.2
11	新寛永	23.5	7.0	2.0	3.0	0.8	1.2	3.0
12	新寛永	23.1	6.5	2.0	3.5	1.0	2.0	2.7
13	新寛永	22.5	6.5	1.8	3.0	1.0	1.2	2.5
14	新寛永	23.0	6.5	2.0	3.0	1.0	1.5	2.7
15	新寛永	22.5	6.5	1.2	2.5	0.8	1.5	2.2
16	新寛永	23.5	6.5	2.5	3.0	0.8	1.5	2.7
17	新寛永	23.2	6.0	2.5	3.8	0.8	1.5	3.1
18	新寛永	24.5	5.5	3.0	3.5	1.0	1.8	4.2
19	新寛永	24.5	6.5	2.0	3.0	0.8	1.0	1.8
20	新寛永	22.0	7.0	2.5	2.8	1.0	1.0	2.2
21	新寛永	23.5	6.8	2.8	3.0	0.8	1.8	2.7
22	新寛永	22.5	6.3	2.3	3.0	1.0	1.5	2.4
23	新寛永	24.0	6.5	2.8	3.5	1.2	1.8	2.8
24	新寛永	22.5	7.2	2.5	3.0	1.0	1.5	2.8
25	新寛永	23.8	6.1	2.8	3.5	1.0	1.2	2.9
26	新寛永	23.3	5.5	2.5	2.0	2.0	1.0	1.5
27	新寛永	23.0	6.5	2.0	3.0	1.0	1.5	2.6
28	新寛永	23.0	6.3	2.8	3.5	1.5	2.0	3.4
29	新寛永	22.8	6.5	2.5	3.0	1.0	1.5	2.7
30	新寛永	22.5	6.5	1.8	3.0	1.0	2.0	2.2
31	新寛永	23.0	7.2	2.8	4.0	1.0	2.0	2.3
32	新寛永	22.5	6.3	2.0	3.0	1.0	1.8	2.2
33	新寛永	23.8	6.0	2.8	3.5	1.0	1.0	3.2

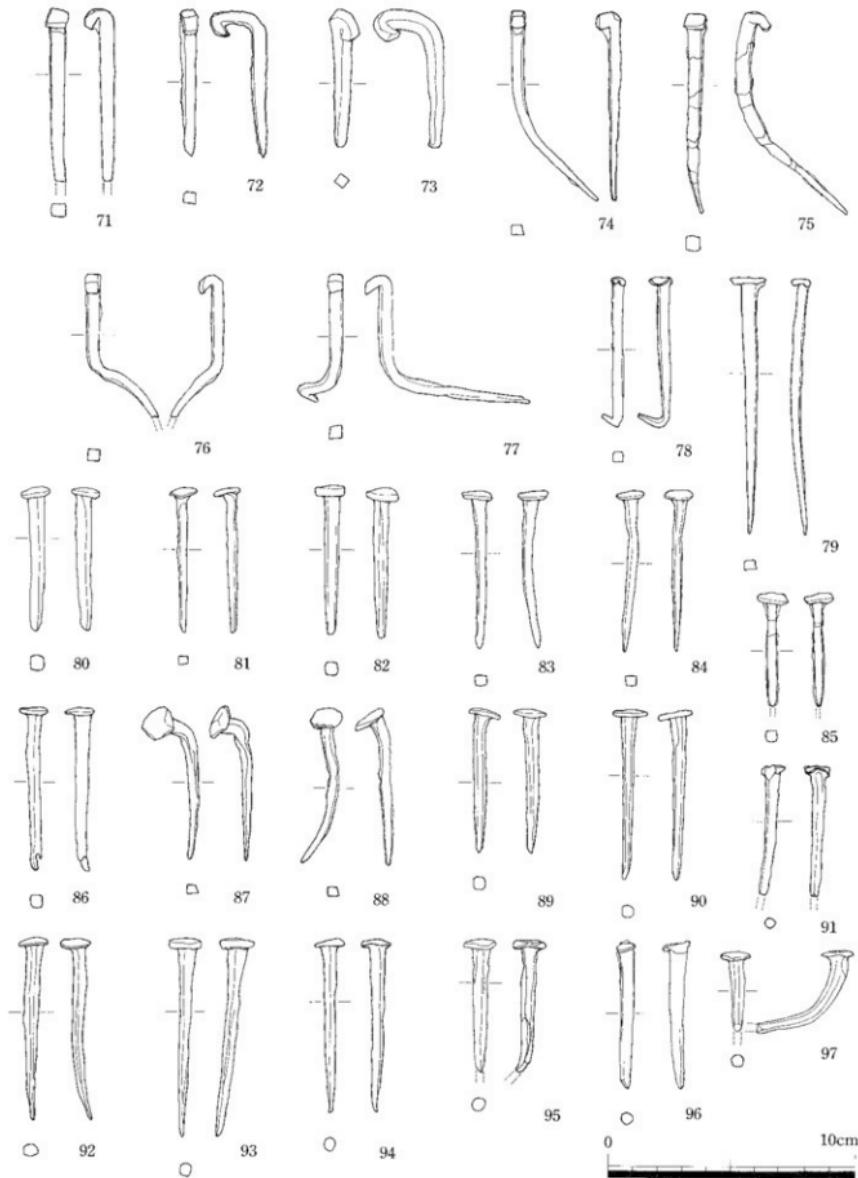
第10図 古銭の計測部位
(円福寺西方遺跡会ほか1986をもとに作成)第11図 鉄釘の計測部位・名称
(青森県市浦村教育委員会1996より)

第2表 鉄釘計測表

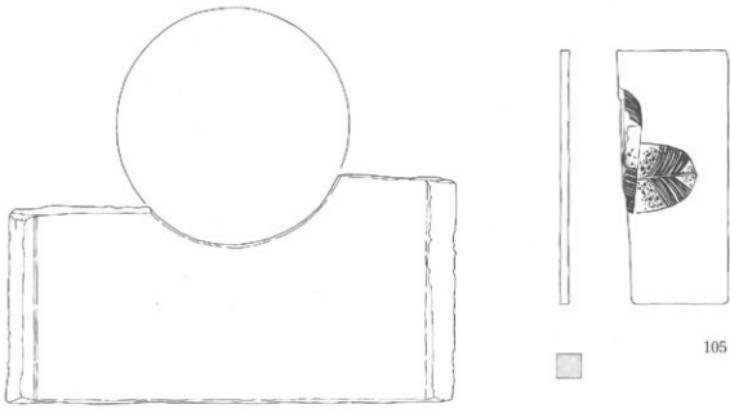
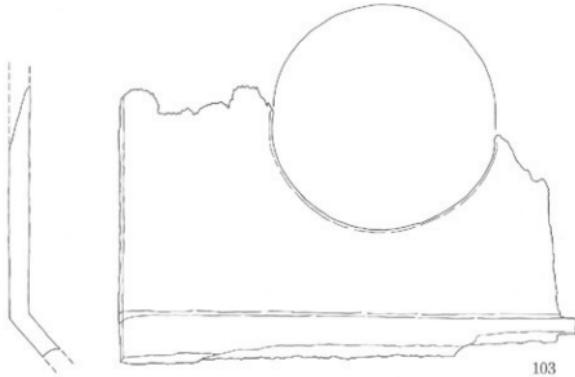
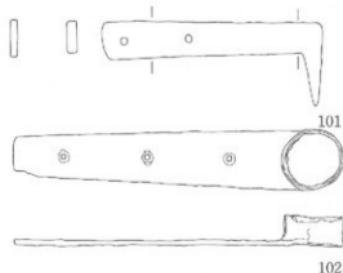
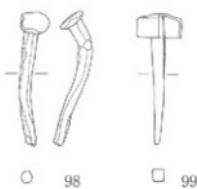
番号	身長	身幅	頭厚	頭長	頭幅	頭厚	重量
50	64.0	4.5	3.8	10.5	7.5	2.5	11.1
51	65.2	4.0	4.0	8.5	5.2	3.0	8.1
52	72.0	5.0	4.5	8.2	7.0	4.5	12.0
53	58.0	5.0	4.5	10.5	6.0	4.0	9.8
54	107.0	5.5	5.5	12.0	7.5	6.0	18.0
55	101.0	6.0	5.5	12.0	6.5	5.0	17.4
56	102.0	6.0	5.5	11.0	6.5	6.0	18.9
57	98.0	5.0	5.5	10.5	6.5	5.0	16.1
58	25.0	4.5	6.0	9.0	5.5	4.0	12.4
59	128.0	6.0	6.0	14.0	8.5	5.0	28.8
60	108.0	5.0	5.5	10.0	6.0	6.0	15.9
61	94.0	5.0	5.0	10.0	6.0	4.5	15.9
62	89.0	4.5	4.0	9.5	5.5	3.5	9.2
63	82.0	5.5	5.5	11.0	6.0	4.5	14.4
64	84.0	4.5	4.5	9.0	5.0	4.0	10.0
65	79.0	6.0	6.0	11.0	5.5	4.0	10.4
66	90.0	5.0	5.0	10.0	6.0	5.0	10.1
67	84.0	4.0	4.0	8.5	5.0	3.5	7.8
68	55.0	4.0	4.5	9.5	5.0	4.5	9.9
69	81.0	5.0	4.5	9.0	5.0	3.0	9.9
70	96.0	4.0	4.5	9.0	5.0	4.0	8.1
71	(70.0)	5.0	5.0	12.0	8.0	4.5	14.8
72	(75.0)	5.0	4.0	10.0	8.0	5.0	12.8
73	(72.0)	8.0	5.5	10.5	7.0	5.0	15.6
74	88.0	5.0	5.0	9.0	5.0	5.0	10.3
75	98.0	5.0	5.5	11.5	6.5	4.0	13.7
76	(69.0)	5.0	5.0	8.5	5.5	4.5	10.0
77	98.0	5.0	5.0	10.0	6.0	4.0	15.8
78	67.0	4.0	4.0	10.0	5.5	1.5	7.3
79	105.0	4.0	6.0	14.5	9.0	1.0	13.4
80	(58.0)	5.5	5.5	10.5	11.0	2.0	8.1
81	59.0	4.0	3.5	10.5	10.0	1.5	5.9
82	(61.0)	5.5	5.5	12.0	11.5	4.0	10.0
83	65.0	4.5	3.0	12.0	12.0	3.0	6.5
84	68.0	4.0	3.0	11.5	11.0	3.0	7.0
85	(47.0)	3.0	3.0	11.5	10.0	3.0	5.4
86	67.0	5.5	5.0	12.0	11.5	3.0	8.4
87	65.0	5.0	4.5	13.0	13.0	3.0	7.9
88	84.0	5.0	5.0	14.0	12.0	3.0	7.6
89	59.0	5.0	5.0	12.5	12.5	2.5	8.8
90	70.0	6.0	6.0	14.5	14.0	3.0	11.7
91	(54.0)	5.0	5.0	9.5	9.0	2.5	6.3
92	74.0	5.5	5.5	7.0	7.0	2.5	9.5
93	81.0	6.0	5.0	13.0	13.0	4.0	11.9
94	70.0	6.0	5.0	12.0	12.0	3.0	8.5
95	55.0	5.5	5.0	12.0	11.0	2.5	7.8
96	80.0	6.0	6.0	10.0	10.0	3.0	9.8
97	(64.0)	5.0	5.0	12.0	11.0	2.5	7.9
98	(52.0)	5.0	5.0	11.5	11.5	2.5	7.7
99	(53.0)	6.0	6.0	1.9	1.9	1.0	14.1



第12図 遺物実測図



第13図 遺物実測図



第14図 遺物実測図

IV 調査結果

1. 遺跡・遺物からみた立山信仰の軌跡

近年になって、山岳宗教に関連する遺跡の調査が進みつつあり、これらの物質資料を考古学的方法で分析することによって、新しい山岳宗教史を描くことが可能となってきている。立山においてもいくつかの発掘調査や不時での発見などによって考古学的資料が集積しつつある。ここではそれらの資料の時期別の在り方を考察することによって立山における宗教活動を5期に大別し、その変遷を概観したい。

立山1期（8世紀末～9世紀）

剣岳山頂遺跡と大日岳の周辺から、8世紀後半～9世紀初めと考えられる銅製錫杖頭などが出土しており、この時期には立山連峰中における宗教活動が始まったと考えることができる。また遺物の性格からは、その宗教活動が仏教系の人々によるものであることが推察される。遺物の分布が剣岳と大日岳の山系に限られることや、剣岳と大日岳の立地関係（大日岳は剣岳に比して低山であり、奥大日岳の周辺からは谷を扶んで剣岳の山容が間近に望まれる）などからは、立山1期において信仰の対象となったのは剣岳であり、大日岳は剣岳を遥拝する場として機能していたと考えられる。

古代の国家仏教は学問を修める平野の寺と、肉体的修行をおこなう山中の道場から成っていたが、その肉体的修行を行なう場として、立山連邦中で最も峨峨たる威容を誇る剣岳が選ばれたのであろう。また、この時期の宗教活動の内容は、堂舎の遺構が発見されておらず、遺物の出土量も少ないとから、大日岳の周辺にある行者窟や剣岳山頂の岩窟などをを利用して鎧山修行をおこなう小規模かつ散発的なものであったであろう。

立山2期（10世紀～12世紀初め）

芦嶺寺宝堂遺跡から10世紀初め頃の立山町上末窟で焼成した須恵器杯の破片2点が出土しており、この時期に宝堂平への修行者の進出があったことを推測できる。この時期に該当する確実な資料はこの須恵器以外には見当たらないが、昭和37年の富山県教育委員会による玉殿・虚空蔵両窟の調査の際の出土品中に「茶色がかった黄褐色のもの」であり、「焼成は固く須恵の系統を引くものであった」と記述されるものがある。この記述から須恵器であった可能性は高く、玉殿窟から須恵器が出土したとするならば、この窟の使用開始時期の下限を10世紀とすることが可能である。このような時期の遺物が、雄山を遥拝する宝堂平とその周辺の地から出土したことは、後に確立した雄山を中心とする立山信仰の成立を考える上で重要であり、その初期的段階に位置付け得るものと考えられる。

また、その遺物の詳細・所在が明らかではないが、大日岳から平安期の須恵器破片等が出土したという記録がある〔立山町 1977〕ことからは、剣岳に対する遙拝が1期以降も続いていることが窺われる。しかし、剣岳からは現在のところ1期以降の遺物が発見されておらず、変わって宝堂平とその周辺に遺物の分布がみられる状況などから、2期には登拝・修行の場の中心が剣岳から宝堂平の周辺に移動したことが推察される。そしてその移動の背景には、剣岳がそのあまりの急峻さのため卓越した一握りの人々しか登れ得なかつたことや、活動の拡大のためには飲料水等の得易い良い拠点が必要とされたことなどがあったものと推察したい。

上記の遺物が立山にもたらされた9世紀末～10世紀初頭の時期はまた、「伊呂波字類抄」（10巻本）において立山開山の祖とする佐伯有若や、「師資相承」に「越中立山建立」の業績を記す天台宗寺門派の祖・康済が実在した時期であり、さらには「新猿樂記」に立山が「大駿者次郎修練の場」であると記すなど、立山登拝の事実が文献上に反映され始めた時期でもあった。また、長久4年（1043）の「本朝法華駿記」や12世紀前半の「今昔物語集」に立山の地獄に関する説話があることから、この頃にも宝堂周辺に修行者が往来していたことを推察できる。

この時期の宗教活動を上記のような資料から推定するならば、それは地獄谷との対比から雄山をはじめとする立山三山を淨土として仰ぎ、玉殿・虚空蔵両窟に竈もって修行するという形であったろう。

立山3期（12世紀中頃～14世紀）

芦嶋寺宝堂遺跡出土遺物の分析から、12世紀中頃から14世紀にかけて、土師器を主体とした遺物量が増加することが判明しており、その中には、13世紀初め頃と考えられる和鏡の破片、14世紀の懸仏破片もみられる。また、虚空蔵窟から出土した北宋銭（治平元宝・至和元宝）や、地獄谷で確認された14世紀に遡ると考えられる宝筐印塔や青石地蔵などの石造物、雄山三の越から採集された12～13世紀の珠州経筒外容器破片（宮本 1993）などの遺物がこの時期に該当する。

これらの遺物の量的変化や分布からは、12世紀頃から宝堂平とその周辺での僧侶・修験者の宗教活動が活発化し始め、14世紀まで盛んとなっていったことや、雄山への登拝が遅くとも13世紀頃までには行われていたことが知られる。そしてその遺物の性格からは、神仏習合や、納鏡・埋經、地蔵信仰など多面的な宗教活動の存在が窺われ、この時期の山岳宗教が地獄谷の「地獄」と雄山の「淨土」の対比という信仰の基本構造に様々な内容を付隨させ、教理を整えていったことが推察される。

また、当時の莊園・軍事関係文書の中に立山信仰を支える宗教組織である芦嶋寺・岩嶋寺の名が表されることからは、この時期山岳宗教が山を拠点としつつも世俗的な力ももつ勢力となっていたことが推察される。

立山4期（15世紀～16世紀）

芦嶋寺宝堂遺跡の発掘結果から、この地には15世紀末頃には小規模な建物が建立されていたことが判明しているが、出土遺物は15世紀にはいると減少し、16世紀には該当する遺物がほとんど存在しなくなる。

宝堂周辺においてこの時期に該当する遺物としては、15世紀のものと考えられる地獄谷の組合わせ式宝筐印塔や雄山山頂から発見された大永4年（1524）在銘の金銅製法華經納礼などがあるが、これらを合せて山中における遺物量は立山3期に比べて少量である。

今後の調査によっては、当期に該当する遺物や遺構が増加する可能性も残されているが、現在の時点では遺物量の減少という現象から、この時期の立山山中における宗教活動は衰退傾向にあったと推察したい。そしてその要因としては、武家勢力や一向宗が台頭し、それらが山岳宗教に取って代わり社会的影響力を増していく当時の時代背景が挙げられるであろう。

立山5期（17世紀～19世紀中頃）

17世紀以降、加賀藩の肝入りによって「宝堂」など多くの堂社が建立され、また芦嶋・岩嶋の衆徒による全国への布教活動もあって、立山信仰が飛躍的に発展していったことが多くの文献資料や遺物によって知られる。芦嶋寺宝堂遺跡では17世紀初頭と考えられる2間×3間の礎石建物と石垣の築造とともに再び遺物量が増加し、その後18世紀初めには礎石建物の増改築にともなって、更なる増加がみられる。これは宝堂の整備によって一度に多くの人の宿泊が可能になった結果、登拝者の数が激増したことを示すと考えられる。あるいは登拝者の増加に対応するために、宝堂を整備したと考えることも可能であろう。周辺の石仏なども近世のものが激増しているのは、こうした背景によるものと推察できる。

芦嶋寺宝堂遺跡の出土遺物の分析によって、18世紀を境として土師器の使用量が激減し、代わって陶磁器類の使用が増加したことが判明している。これらは、まだ下界の様相とは性質を異にするところが多いが、山上における中世的な宗教色が薄れ、大衆化しつつあったことを感じさせるものである。

以上、古代から近世までの立山信仰の流れを考古資料を中心として概観してきた。近代以降、庵仏毀釈・修験禁

止等の国の政策によって立山信仰も大きく変わってくるが、山上の信仰が下界の社会の動向と別にあったのではなく、常に密接に連動していたことは明らかであろう。今後山麓部等の調査によりさらに詳細な立山信仰の変遷が明らかになることと考える。

(人野)

2. 雄山神社峰本社の成立に関する考察

(1) 頂上社殿について

雄山神社は、峰本社・芦嶋守前顕殿・岩崎寺前立社壇の三社から成り、峰木社頂上社殿はその名の示す通り、雄山神社全体の本殿である。

標高3,003mの雄山山頂に鎮座する今回建て替えられた旧社殿は、万延元年（1860）に再建（建て替え）されたものである。創建年代は明らかではないが、社伝では一千数百年前と伝える。

社殿の構造は、間口三間社・奥行二間・総檜造りである。向かって右座に剣岳の神とされる刀尾神を、向かって左座に雄山の神とされる雄山神を祀る。^{じきのおじん}中央一間には権があり、権上の神座には五穀守護の神を祀るとされ、下段には祭具が納められている。

なお「立山文化遺跡調査報告書」では、奉仕神職の人々からの聞き取り調査として、「現在は万延建替当初のままであるが、それ以前の社殿は、この中央の間口には後方の羽目板が無く、中間を遮して天空遙かの剣山頂を中心とおして拝したのであるまいかとの説もある。」と、昔日の本殿に関する伝承を紹介している〔富山県教育委員会 1970〕。

(2) 立山信仰の変遷

近年、富山県立山博物館を中心として、立山山中に育生する山岳宗教関係遺跡の調査・研究は長足の進歩を遂げている。特に、平成4～5年の夏に発掘調査された「芦嶋寺宝堂遺跡」の報告書では、それ以前の調査結果も併せて、立山における宗教活動を、以下の5期に大別している〔立山町教育委員会 1994〕。

立山1期（8世紀後半～9世紀）

立山連邦山中における宗教活動の開始期である。

遺物は、剣岳と大日岳山系に限って分布しており、剣岳と大日岳の位置関係などから、信仰の対象となったのは剣岳であり、大日岳山系は剣岳の遙拝所として機能していたと考えられる。

立山2期（10世紀～12世紀始め）

登拝・修行の場の中心が立山に移る、いわゆる立山開山の時期である。

遺物は、室堂平とその周辺にのみ分布し、剣岳からは、発見されなくなる。これは、剣岳が修行の場から、遙拝の対象へと変化したことを象徴しているものと考えられる。

また、正殿窟・虚空蔵窟などが参籠修行の場として成立した時期でもあり、この頃成立した「本朝法華験記」や「今昔物語集」に立山の地獄に関する説話があることから〔立山町 1977〕、「雄山山頂を淨上と仰ぎ、地獄谷と対比する」という、現在の立山信仰の原型が成立した時期と考えられる。

立山3期（12世紀～14世紀）

立山信仰の最初の興隆期である。

遺物の分布範囲が、「雄山三の越」や「地獄谷」まで広がり、近世以前では遺物出土量が最も多い。

また、莊園・軍事関係文書には「芦嶋寺」「岩崎寺」の名がしばしば登場して、両集落が世俗勢力として興隆していたことを示しており、この事実も当期における立山信仰の興隆を間接的に示すものと考えられる。

立山4期（15世紀～16世紀）

立山信仰の一時的な衰退期である。

立山全体で遺物量が減少するが、「室堂」においては15世紀末に小規模な建物の建立が確認されており、宗教活動は確実に継続していたものと考えられる。

立山5期（17世紀～19世紀）

立山信仰の再興期であり、信仰の場としての立山の最盛期である。

石仏などを含めて、遺物は激増する。

「室堂」においては、17世紀初頭に2間×3間の礎石建物の建立と石垣の構築が行われ、18世紀始めには建物の増改築が行われている。これは、登拝者数の大幅な増加を示すものと考えられる。

以上が、文献学・考古学の研究成果による、現時点での立山信仰に関する編年概要である。

（3）「タチヤマ」の呼称の変遷

立山は、古くは「タチヤマ」と呼ばれており、その語源については種々の説があるが、「そびえ立つ山」と「神の顕つ山」いう2種の意味が込められているという広瀬誠氏の説〔広瀬 1985〕が最も適切であろうと思われる。

この「タチヤマ」の語が現れる最古の文献は『万葉集』であり、そこでは「多知夜麻」などと記述されているが、これは現在の立山を示すものでないと考えられる。

前節の編年によれば、『万葉集』の編纂された8世紀代は立山1期にあたるが、この時期、信仰の場は剣岳と大日岳山系に限られており、信仰の対象となったのは剣岳で、大日岳山系は剣岳の遙拝所として機能していたと考えられるのである。

すなわち、「タチヤマ」は1期（8世紀後半～9世紀）には剣岳の呼称であり、現在の室堂周辺に信仰の場の中心が移った2期（10世紀～12世紀始め）以降、現在の立山の呼称として定着したものと考えられるのである。

（4）立山信仰における「聖なる山」の変遷

第2・3節により、剣岳が1期（8世紀後半～9世紀）には「タチヤマ」と呼ばれる立山信仰の最初の中心地であったことは明らかである。

ところが、近世の立山信仰においては、剣岳は「登れない山」「登ってはならぬ山」とされ、『立山曼陀羅』においては「地獄の針の山」（＝「穢れた山」）として描かれている。なぜ、このように極端な位置付けの変化がおこったのであろうか。

この、立山信仰中にしめる位置の変化は、次のような段階を経たものと考えられる。

まず最初は、「聖なる山」は聖なる故に、なるべく足で穢してはならぬという意識が成立する。

次に、この意識が不文律化し「禁足地」となる。ただし、「聖なる山」であるという認識は保たれているので、遙拝所から遙拝することとなる。

そして最終的には、「禁足地」であるという不文律だけが残って「聖なる山」としての記憶は失われ、かえって「禁足地」であるが故に「穢れた山」と考えられるようになる。

以上の変化段階を剣岳に当てはめると、次のようになる。

第一段階 「聖なる山」であり、足で穢してはならぬという意識が成立する。剣岳が特に登頂困難な山であった

ことも、このような意識の成立を助長したであろう。また、大日山系が登拝路であるという位置関係より、この段階ですでに、剣岳は遙拝の対象でもあったと考えられる。

考古遺物による実年代は、8世紀後半～9世紀代の立山1期が、この段階に相当する。

第二段階 「禁足地」となり、「登れない山」「登ってはならぬ山」という口伝（＝不文律）が成立する。ただし、「聖なる山」であるという認識を十分に保ちつつ遙拝の対象にしていたと推定できる。

考古遺物の分布から、この段階の始まりの年代は、立山2期の始め10世紀前半であろうと考えられる。なお、終わりの年代については、かなり判断が難しい。というのは、一般登拝者が別山から剣岳を遙拝するという神事が立山5期の終わりまで続けられていたからで、第二段階が立山5期の終末まで続く可能性もある。しかし、第1節で引用した書き書きによれば、万延元年の建替により頂上社殿から遙拝所としての構造と機能が失われたことになり、立山信仰の至聖所である頂上社殿の性格の変化を大きな画期ととらえ、この建替の行われた19世紀中頃を第二段階の終わりと考えたい。

第三段階 「地獄の針の山」(=「穢れた山」)であるとされる。ただし、「聖なる山」としての記憶が全て失われた訳ではなく、立山5期の終わりまで剣岳を遙拝していた事は先に述べたとおりである。

また、「立山曼陀羅」における描かれ方を見ると、19世紀中期以前には「称念寺本」「志鷹新太郎氏本」など、剣岳が明確に「地獄の針の山」の形態をとらないものもあり〔富山県立山博物館 1991〕、この頃に認識の変化があった証拠とも言えるであろう。

(5) 峰本社の成立過程

以上、立山信仰を種々の側面から見てきたが、これらの考察結果から、峰本社の成立過程について、次のような推論が成り立つ。

すなわち、当初、峰本社の原型となる建物は剣岳の遙拝所(=拝殿)として成立したと考えられ、その時期は、雄山への登頂基地となる宝堂平周辺で考古遺物が当始める10世紀をあまり遡らない頃であろうと推察できる。

しかし、程なく、雄山あるいは立山三山が「タチヤマ」と呼ばれる様になるに従い、徐々に自らが至聖所と化し、立山信仰全体の本殿としての地位を確立した。すなわち、「立山淨土」の成立である。そして、その成立には「立山地獄」の存在と末法思想の流行が一役かっており、時期は立山2期の始め10世紀代であろう。

この様にして峰本社は成立し、淨土と地獄を現出する立山信仰は、近世に至って隆盛をきわめる。しかし、古い形態である剣岳への信仰(旧聖地への信仰)も、細々とではあるが継続しているのが特異な点といえる。

そして、この旧聖地への信仰の衰退の変遷を見ると、「禁足地」化(10世紀前半)から「新聖地」の遙拝所廃絶(19世紀中頃)へという流れが読みとれ、900年という長い時間をかけながら、自然物崇拜から神社参拝へという神道全体の変化にも対応しており興味深いものがある。

なお、峰本社における刀尾神の右上座や、別山からの剣岳遙拝などは、古い信仰の痕跡が後世に残る形態を示す良い例と言えるであろう。

(三編)

参考文献

- 青森県市浦村教育委員会 1996 「十三ヶ遺跡一市浦村第1次・第2次発掘調査概報一」
- 伊藤美鈴 1993 「第4章、第2節、釘」「一の谷中世墳墓群遺跡」本文編 磐田市教育委員会
- 円福寺西方（西台三丁目団地）遺跡調査会ほか 1986 「五段川遺跡I」都営西台三丁目団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 金箱文夫 1984 「近世の釘」「物質文化」43 物質文化研究会
- 川根正教 1995 「寛永通寶錢の基礎的研究1（上）形式分類と編年」「出土錢貨」第4号 出土錢貨研究会
- 川根正教 1996 「寛永通寶錢の基礎的研究1（下）形式分類と編年」「出土錢貨」第5号 出土錢貨研究会
- 高瀬重雄 1977 「立山信仰の歴史と文化」名著出版
- 立山開発鉄道株式会社 1962 「越中立山古文書」
- 立山町 1977 「立山町史」上巻
- 立山町教育委員会 1994 「芦崎寺宝堂遺跡—立山信仰の考古学的研究一」
- 富山県教育委員会 1969 「立山地区民俗資料緊急調査報告書」
- 富山県教育委員会 1970 「立山文化遺跡調査報告書」
- 富山県立山博物館 1991 「立山のこころとカタチ—立山曼陀羅の世界一」
- 広瀬誠 1984 「立山黒部奥山の歴史と伝承」桂書房
- 宮本哲郎 1993 「立山採集遺物について」「大境」第15号 富山考古学会
- 文部省登山研修所 1973 「立山連邦」
- 山内賢一、久々忠義 1988 「立山天狗平で採集された石器について」「大境」第12号 富山考古学会

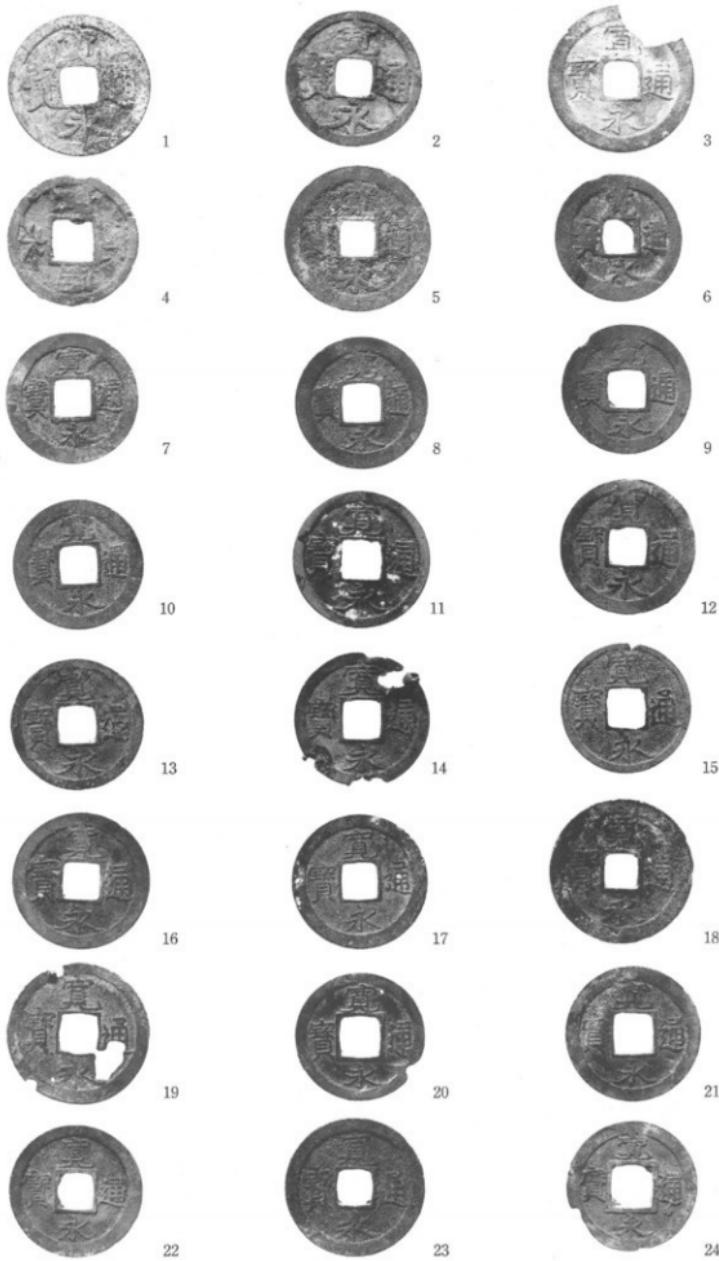
調査風景



調査風景



古 錢



古 錢



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43



44



45



46

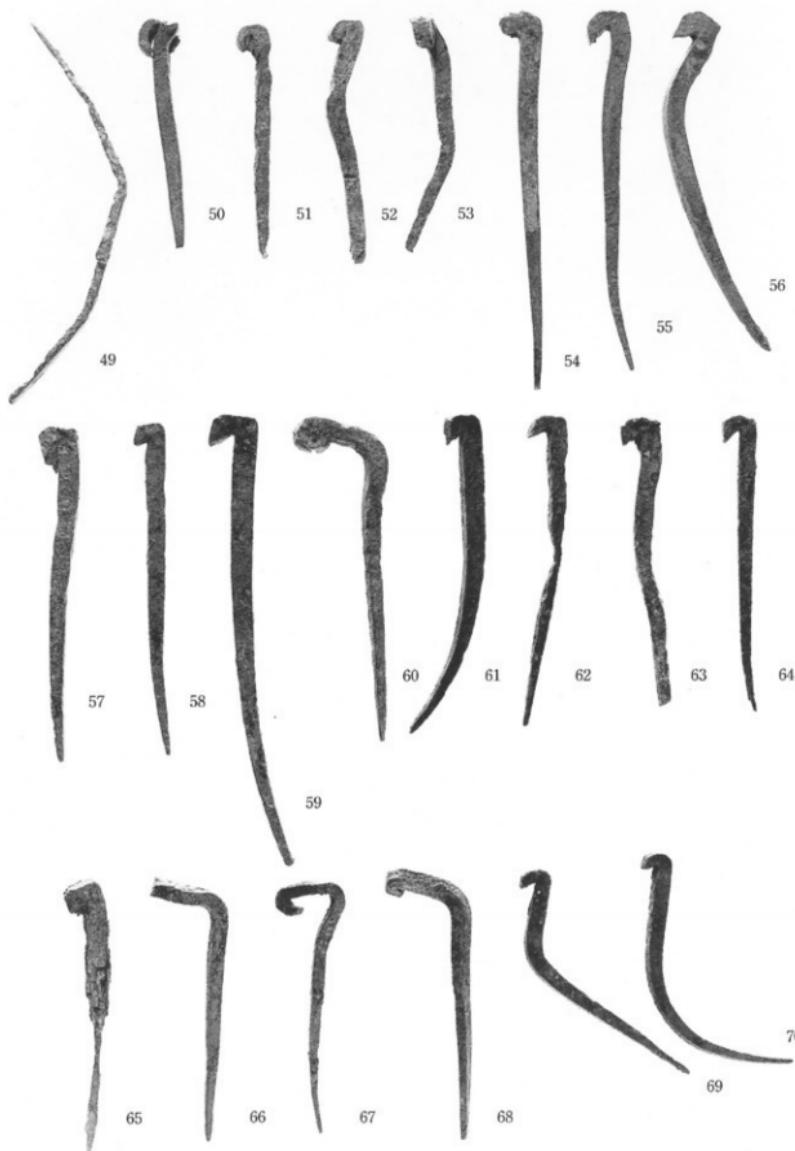


47

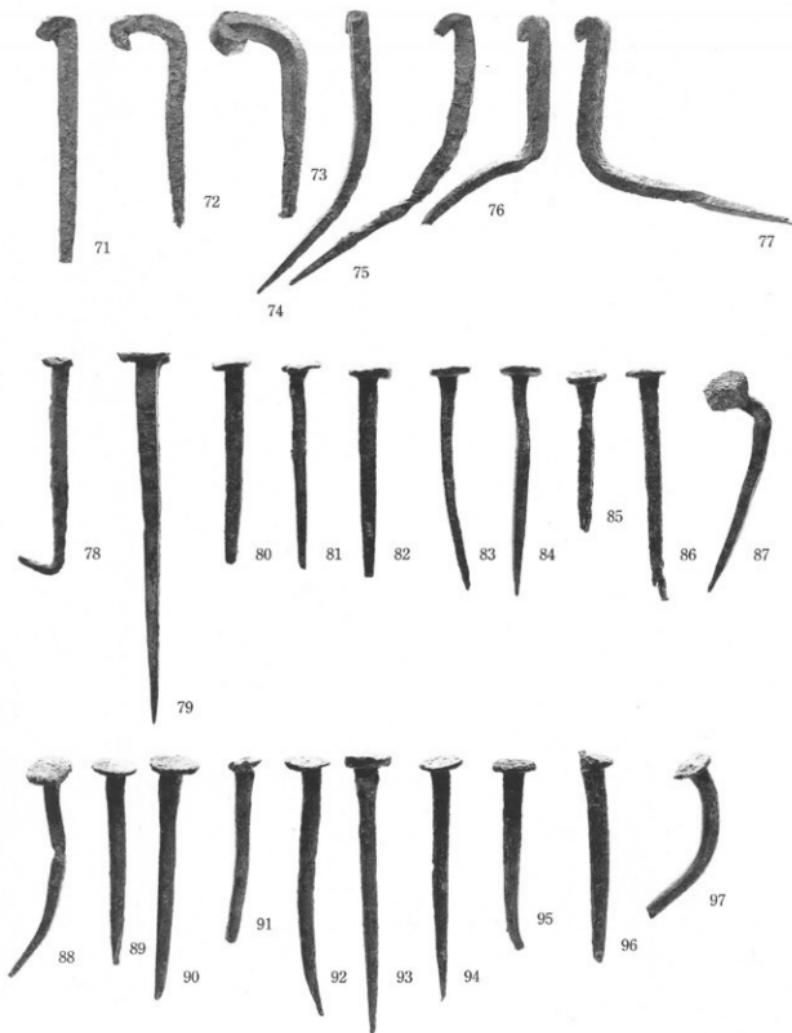


48

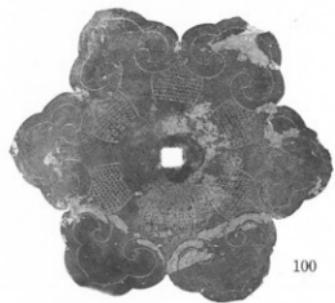
刀子・鉄釘



鉄釘



金属製品



100



99



98

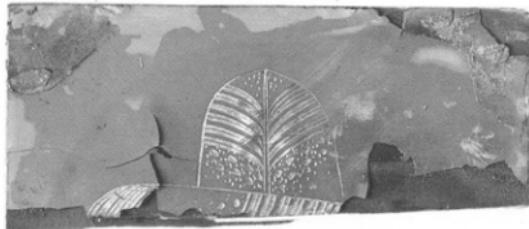


101



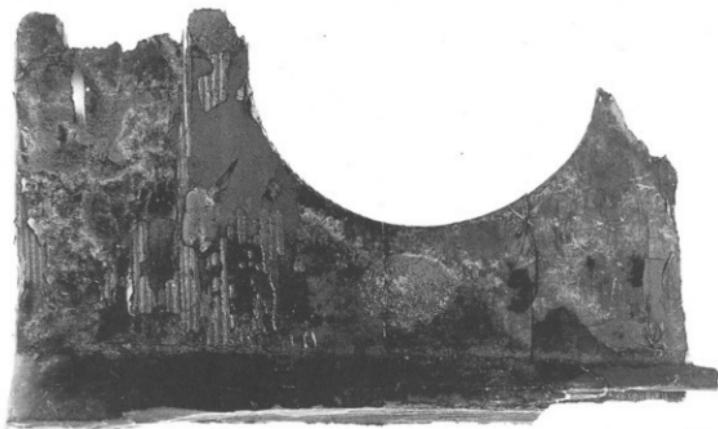
102

木製品



105

木製品



103

木製品



104

報告書抄録

ふりがな	たてやまおやまんちょういせき						
書名	立山雄山山頂遺跡						
副書名	雄山神社峰本社社殿建替事業に伴う調査						
編集者名	三鍋秀典						
編集機関	立山町教育委員会						
所在地	〒930-02 富山県中新川郡立山町前沢2440番地						
発行機関	立山町教育委員会						
所在地	〒930-02 富山県中新川郡立山町前沢2440番地						
発行年月日	西暦1997年3月						
ふりがな	ふりがな	コ ー ド	北緯	東緯	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号	°°°	°°°			
立山雄山山頂	富山県中新川郡 立山町立山峰1 番地(芦崎寺)	323	151	36° 34' 12"	137° 37' 12"	19960603 ~ 19960605	50 雄山神社峰本社 建替業に伴う
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特殊事項
立山雄山山頂	祭祀	中世・近世			銭・釘・漆器		

立山雄山山頂遺跡
雄山神社峰本社社殿建替事業に伴う調査
立山町文化財調査報告書第25冊

発行日 平成9年3月31日
編集・発行 立山町教育委員会
印刷 (有)日本海印刷

